Technical news

Vol.3

AFCアジアカップ—
中国2004、視察報告

ユース年代日本代表
チームからの報告

連載：審判員と指導者、
M・メルク国際審判員

特集
ユース年代、国内各種大会
テクニカルスタディを実施

財団法人 日本サッカー協会

GKプロジェクト活動報　告

今回の「GKプロジェクト」からの報告は、同プロジェクトメンバーによる、ユース年代の日本代表チームおよび、各種大会の視察報告を紹介します。

1. 各年代の日本代表チーム

U-18日本代表～国際ユースサッカーIN新潟参加

7月16日から19日まで行われた国際ユースサッカーIN新潟において、U-18日本代表は全体を通して非常に良いパフォーマンスを見せた。GKのプレーに関しても、すべてのゲームにおいて安定したパフォーマンスを見せてくれた。

GKのトレーニングに関しては、12日に集合し14日にU-18イラク代表との親善試合があるため、コンディショニングに重きを置きトレーニングを行った。コーディネーション（ステップワーク）を多く取り入れ、やや負荷をかけながらオーバーハンド、アンダーハンド（バウンジング・グラウンダー）のキャッチを行い、その後クロス、フリーシュートを行った。また、ゲーム間隔が狭いため、リラクゼーションにも心がけた。

【今大会のGK総評】
○イラク代表GK：特筆すべきプレーはなったが、反応スピードはあった。とくに、大会前の親善試合では日本のチャンスを2本確実にブロックしていた。
○パラグアイ代表GK：GKの技術的なものは低かったが、指示の声、鼓舞する声はたくさん出していた。

【日本のGK総評】
○U-18日本代表の両GKは、パワーの部分で非常に向上しており、ダイナミックなプレーができるようになっていた。
○今後の改善点として、ポジションの修正、特に攻撃から守備に移るとき（チームがボールを失ったとき）の修正が遅かった。その原因の要素として、ゲームの流れを読む「洞察力」が挙げられると思われる。「今、何が起こっているのか」、「次に何が起ころうとしているのか」を意識しながらプレーすることができていなかったように思う。（「観る」対象の具体的な指導・ディスカッション）→GK目線のビデオを導入し、ミーティングを行うのがベターと思う。
○ゲームの流れに常に関っていく意識が今後の課題と思われる。この意識が習慣化されることにより、より良いコーチング・より良いリーダーシップが発揮できるものと思われる。（以上、石末龍治）
※20ページ参照

U-16日本代表～北アイルランド遠征（ミルクカップ参加）

【日本のGKの成果】
5試合で失点が1点だったことは評価できる。積極的なゴールキーピングは意欲を持ち、集中力高く行うことができた。
シュートストップ、ブレイクアウェイの状況下に際しても安定した対応を行うことができた。また、攻撃への参加においては、2人のGKともにロングフィードから直接得点へ結びつけるシーンやチャンスをつかむシーンを作り出すことができた。クロスへの対応では、相手の大型選手へ送り込まれるクロスに対しても積極的にチャレンジを試みた。

【課　題】
クロスへの対応においては、積極的にチャレンジすることはできたが、コンタクトプレーで競り負けるシーンやパンチングにおいて安全確実なクリアができず、リバウンドを再度拾われるシーンがあった。また、今大会の１失点は相手CKより送られてきたクロスに対して、競り負け押し込まれた失点であった。
攻撃への参加では、ロングフィードによって得点および得点チャンスを作り出したものの、ゴールキックやバックパスの対応に際して、キックミスを連続するなどのミスも出た。このことによりチームのリズム、試合の流れを崩してしまうことがあったことも否めなかった。
今大会唯一の1敗となったPK戦においても、GKの存在感を発揮するに至らなかった。動き出しのタイミングが速かったことと、コース選定を確実に行えず、逆を取られるシーンが目立った。

【大会総評】
それぞれ違う国々のチームと5試合戦えたことは良い経験となった。北アイルランド、アイルランド、英国、ニュージーランドと大型選手（185cm以上）を3～4人揃えてフィジカルの強さを前面に出して来るスタイルが特徴で、球際の強さは大きな体験となった。心身ともに闘わなければならないことも学んだ。また、アプローチの距離（間合い）を詰めないと相手に自由に蹴られてしまいピンチとなってしまうこと、大型選手を揃えたチームに対して不用意なファールを犯すことは、相手ＦＫによってピンチを招いてしまうことも学んだ。
南アフリカのチームは、他の4試合とはサッカースタイルも体力的な特徴も違った。アフリカン特有のスピードや柔軟性、足の出し方などがそれまでの4試合とは違って異なっていた。また、ワン・ツーパスやドリブル突破も特徴で、不用意に飛び込むとワンタッチパスで裏を取られることがあった。（以上、加藤好男）
※22ページ参照

2. ユース年代、国内各種大会より

全国高校総合体育大会

※2ページ参照

【総　評】
視察対象はベスト4以上に進出するチームのGKであり、身体的に各チームとも180cm以上と大きな差は見られなかった。ボールを保持する技術なども身に付いており、比較的スムーズなプレーが多く見られた。GKに対する指導も、近年普及してきており、ゴールに飛んでくるボールを直接処理するいわゆるシュートストップの場面について、確実にスキルは向上してきていると言えるであろう。
しかし、ミスの場面の考察を行うと、ボール位置に対するポジションミスであったり、十分に視野を確保してなかったりといった、プレーの原則のミスに起因するものが多く見られた。また、攻撃から守備に切り替わったとき、チームとしての役割をGK自身が明確にしておらず、ポジショニングのミスを犯して失点するといったような、DFやその他のFP（フィールドプレーヤー）とのコミュニケーション不足からのミスも見られた。
すなわち、ゲームのレベルが向上し、めまぐるしく攻守が入れ替わったり、一瞬の隙をつくダイレクトプレーが指向される傾向がみられる中、GKに対して要求される、さまざまな要素としては、より高いサッカーセンスを持ち合わせることであり、チームの一員として「Good Position」をキープし続けてプレーを行えることが要求されてきているのである。（以上、山中亮）

日本クラブユース選手権（U-15）大会

【プレーに関して】
各地域からの参加チームの地域差が減少してきており、そのような状況の中、GKの基本的な技術やスキルにおいてもチームの格差が減少してきており、全体的なレベルアップが見られた。とくにシュートストップの技術については、各チームとも大きな格差は見られなかった。
そのような格差の減少がみられる中でクローズアップすべき点としては、「Good Position」をとり続けるなど、ゲームに関わりながら、よりアグレッシブなプレーに関することであろう。ミスや失点の状況を考察してみると、連続した攻撃を受けた状況、大きくアングルを変えられた状況、至近距離からのシュート、自分のタイミングをはずされたシュート、クロス、セットプレー、DFとのCommunication＆Combination不足、ビルドアップへの参加などの状況が挙げられる。すなわち、より堅実な守備を要求されながらも、サッカープレーヤーとしてのセンスが要求される状況へとゲームにおける要求も変化してきていることが考えられる。
Jクラブと地方のミドルクラブのGK基本技術の差が縮まってきていることを考えると、近年のGKプロジェクトにおける取り組みが、地方にも普及し浸透してきていることのひとつの結果であると考えられる。（以上、慶越雄二・佐々木理・藤原寿徳・赤池保幸・石末龍治・伊藤裕二・山中亮）

全国中学校サッカー大会

【総　評】
8月20日から甲府市を中心に試合が行われたが、GKの視察については、23日（準決勝）よりの視察となった。猛暑の中の4戦目、5戦目となり、選手の疲労度が心配されたが、大きなけがなどは発生せず、比較的スムーズにゲームが行われた。しかし、疲労の蓄積からか、ゲーム序盤は身体が重く、少し雑なゲームも見られた。
各チームのGKについては、直接ゴールに向かってくるボールを処理するようなシュートストップの場面に対して、ボールを保持する場面での大きなミスは見られず、基本的な技術の向上がうかがえた。しかし、「ゲームに関わること」は十分とは言えず、状況にあった適切なポジショニングは十分にはとれていなかった。そのため、DFラインの背後に送られたボールに対する処理や、シュートコースのアングルがなくなってくる場面や、クロスの場面などでのポジションミスが見られ、そのような状況でのミスによる失点が見られた。
また、ディストリビューション（配球）については、キックが多用され、チームとしてのボール保持（ビルドアップ）よりも陣地挽回を目的とした配球となっている傾向があり、簡単に相手にボールを保持される場面が多く見られた。チームの戦術なども関係してきているであろうが、せっかくボールを保持しているのに簡単に相手にボールを奪われてしまうような攻撃が行われているのであれば、チーム全体での攻守におけるコンセプトの共有を行いながら、ディスカッションの必要があるのではないかと思われる。
プレーヤーはまだ育成段階であり、発展途上であるが「ゲームに関わる」という観点からみると、まだ、FPとGKというような、2つに分けられた位置づけのプレーが多く、とくにチームとしてのビルドアップに参加している姿などは、ほとんど見受けられなかった。現在、GKはよりFPの要素が要求されてきており、これはサッカープレーヤーとしてのベースがあってこそ実現されるものである。そういう意味でも、今後のコーチのGKのプレーに対してコーチングを行う観点として、GKのプレーをサッカーのプレーヤーとして、サポートやポジショニング、コーチングなどが行えているかという視点から分析していくことが重要である。すなわち、ミスの起こった局面に限定したようなコーチングではなく、ゲームの流れの中でFP同様コーチングを行うことが重要であろう。（以上、山中亮）

テクニカル・ニュース　Vol.3

○発行人：田嶋幸三
○編集人：財団法人日本サッカー協会技術委員会・テクニカルハウス
○監　修：財団法人日本サッカー協会技術委員会
○発行所：財団法人日本サッカー協会　〒113-0033 東京都文京区本郷 3 丁目10番15号 日本サッカー協会ビル　電話 03-3830-2004（代表）
○発行日：2004年 9 月25日